
the Summer Sea Sky

飛焰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

the Summer Sea Sky

【Nコード】

N5451N

【作者名】

飛焰

【あらすじ】

言の葉の森 夏祭り企画小説「夏休み＋海＋運命のスイカ割り」
化学反応「

終業式である。とりあえず今日が終業式でここから夏休みひゃっほーいな時期になるわけである。と、いつても期末で赤点をとった人々にとってはあんまし喜べない時期なのだろう。この糞暑いなかで熱のこもる教室で……まあ、多少の人口密度は緩和されたとしても各クラスの赤点の勇者たちが一つの教室に集うわけだ……結局のところ暑いんだろうなあ。

だが特に親しい友人がいない方からしたらちよつと羨ましいものである。友人という友人がそんなにいないため夏場に遊びに行くのはほとんど限られる。そう毎日遊んで暮らすわけでもないしこのご時世、我が私立T高校はバイトが全面的に禁止なため特に打ち込むことができるものはない。そうなれば夏休みは怠慢に過ごすだけであって……。

憂鬱だ。そんな夏をどう過ごせばいいんだ？ 宿題なんて1時間かそこらやってれば直ぐに終わるようなもんだぞ？ これは定年退職したオジサンがこれからをどう過ごせばわからないという時期に突入するわけであって……ああ、ダリイ……。

思考の片隅でざわめく教室では俺とは違って遊ぶ予定とかなのだろう。本当に羨ましい限りだ。暇人はどういう生活を送ったらいいのかは非ともご教授ねがいたいぐらいだ。まあ、どうせゲームとかで夏休みを過ごすのだろう。

それなら新作のゲームでも欲しいんだけどバイトできないし、お小遣いなんてもう随分と貰ってないし、アイツが終わるまで待機だろう。

暇だ。ほんつとに何をしたらいいんだか……。

(悠ちゃん、ちょっと悠ちゃんって！)

気がつけば背中を指で突っついて来たのはスポーツ刈りで短い髪の毛をワックスでつんつんにたてた悪友……という分類の友人である、明日川啓輔あすかわけいすけであった。その見た目どおり暑苦しい男で出席番号的に小学校、中学校、高校けんざいと俺の後ろに常に配置されているいわばストーカーだ。気だるく先生の話を聞き流していた俺は思考を切り離し、その事に気がつくのは皮肉にも啓輔のおかげで早かった。

「安里ー！安里悠助！」

「あ、はい」

終業式後のLHRで名前を呼ばれるという事は1つしか思い当たる節はない。普段の素行は当たり触れない俺が呼ばれるとしていたら、決まってることはある。何時ものことであつたので俺が気がつかないのも頷ける。なんか教室が騒がしいと思いつつながら思考してるとそういうことか。浮き足立つものの興味のないものに分類できるであろう俗に言う『悪魔手帳』の譲渡である。

俺は渋々席から立ち上がり、俺の名前をさつきから呼んでたであろう、大久保先生、どういふ訳かあだ名が某カードゲームで有名な神様な巨神兵に近づく。

うをお？ この威圧感にスーツ越しでも伝わる筋肉！ これは…
…そう呼ばれても仕方ないんじゃないかねえか。つか、担任相手に今更な反応か。

「安里」

「は、はい……」

巨神兵の威圧感に小さくなる俺。この先生が補修担当な古文の赤点者にはもうなんてコメントしたらいいかわからねえ。ご愁傷様と言えば済むんだろ？これがこれ？特に当たり触りない成績の俺には迂闊な真似をしない限り無縁なことなだけだな。バリカンで自分で剃ったのだろうか？少し荒っぽかったのは日頃のストレスか？

いやいや、気を引き締める気を。今だけ。

「もう夏休み気分か？ 気を引き締めるよ」

「は、はあ……」

言われると分かっていた言葉に、気の抜けた返事がついつい出る。その俺の気の抜けた返事にオベ スクの眼が動いたような気がする。そして、その瞬間に俺は戦慄する。つまりは、死の直感。

内心ビクつきながら俺は成績表を手渡しでもらう。正確には、
「つかんだ」だ。

「……」

「……」

手放さない。オベ スクの野郎、放しやがらねえ。これが学校がケチって毎回のように配ってるペラッペラな紙であつたらすぐ真っ二つに分かれていただろう。それほどまでの表面化の力のぶつかり合い。俺とオベ スクのやり取りに笑いが巻き起こる。

おのれ教師め。一人の教師を生贄にする気か？ これ以上なにを

望むというんだ？ 生徒一人を生贄に生徒に強い注意を呼びかけがって。俺を反面教師もとい反面生徒にしたてあがりやがって。ああこれでボーっとしてた生徒もこの喧騒で目を覚ましただろうなあ！ 今、机に伏せていた悪魔もなあ……！

「ありがとうございます」

最上級に引きつった笑顔で心にもない事を言うと、オベ スクの力が抜ける。俺とオベ スクの謎の戦いはオベ スクの勝利で終幕した。くそつ、始業式の時に覚えてるよ。担任とこんなやりとりをするなんて、最悪だ。できるだけ目立たない学校生活を心がけてるっていうのに。

最後の最後でやらかしたか。まあ別に構わない、クラスの連中の顔と名前は夏休みを過ごしてるだけで記憶から薄れる。そんなに親しい連中ってわけじゃないんだ。教壇の目の前、つまるとこの中央列の一番前でにこやかに微笑んでいらっしやるプリンセスとは違ってねえ。つてかにこやかに微笑むって、『頭痛が痛い』つてのと同じレベルか？

特に頭のよろしい訳でもよろしくない訳でもない俺は一人ちよつとした疑問にぶち当たった。とりあえず先のオベ スクとの戦闘で俺はいい晒し者だ。ここは礼儀を欠かさないためにも敗者には敗者なりの態度をとろう。

俺は喧騒の中心であることで、締めには肩をがっくり落とすリアクションをとる。アメリカンなコメディアンもびっくりするような肩の落とし具合で教室の後ろの連中にも分かりやすい動作をする。ねぎらつ言葉と冷やかす言葉が入り乱れる場を逃げるように動く、ふとした瞬間にプリンセスと目があう。澄んだ目に澄んだ黒い髪。

ここに居てもいい匂いがしてくるあたり、その前後左右の席にはアロマセラピーにでもなってるんじゃないだろうか？

どうでもいい思考をしながら特に目を配ることもなく去る。小さく手を振っていた姿は哀れな子羊をねぎらつてるように見えた。そこに俺の反骨精神が猛くいきり立った。おのれ、確かに芸能界でも食っていけそうな面構えだからつていい気になんじゃねえぞゴラァ。静かに殺気を静めた目で振り返ると、俺の視線に気がついたプリンセスはにこやかに笑って見せた。

こ、こいつ……！ 気がついた時には遅い。机の角に面妖なキヤラクターを描いてあり噴出しからは『お疲れ』とだけ描かれていた。何者だ、貴様は伊賀の者か？ 甲賀の者か？ 白百合のように清く正しそうな淑女が机に落書きだと？ これで幾人の男という男をたぶらかして来たのか？ 恐ろしい娘！ 珠洲守真澄すずもしまさみは要注意人物に間違いない。

「明日川！」

「はいはいはい」

そういった数秒のやり取りの後に、すぐさま担任から名指して呼ばれるのは当然こいつであり、必然的に席に戻るときに出会い頭になつてしまふ。啓輔はにやけ面のまま俺に（厳密的にいうとオベスクに）近づいてくる。明らかに先程のやりとりで美味い餌でも見つけた気分なのであろう。こういった人をからかう悪い癖は学校生活を順風満帆に送ってるコイツらしい。

俺は自身でもわかるくらい不機嫌な面のままで席に戻ろうとした時に、啓輔が俺の肩を叩きノートを千切ったものを更にコンパクトに折った紙。それを、オベスクにバレないように手渡す。その視

線は「受け取れよ」というのが染み出ている。俺は奪い取るかのように啓輔から受け取り席に戻ると、机の教科書をいれる陰に潜め開封する。

メッセージは簡単。女の子のようなかわいらしい丸文字にあっかんべーをさせた落書き。内容は一言。

『バーカ』

単純にその一言だけが書かれていた。オマケになんかム力つくあつかんべーをした絵が地味に上手いことが余計に腹立つ。憎憎しいと紙を丸めてポケットに突っ込み、そして俺は視線をその送り主に向ける。ん？ この変なキャラクターいましたが見た記憶があるんだが……いや、気にしないでおこつ。俺は消しゴムで密かに落書きを消してる珠洲守を暖かく見守る。

ああ、そうか女子が度々、黒板で落書きしてたのも見たことがあるな。この憎たらしい顔の奇怪生物がプリンセスが来たものと同じかと考えると、この奇怪生物は腹黒いらしい。

「お前はさつきは労つといて、馬鹿よばわりか？」

小さくそう呟くと、丸めてポケットに突っ込んだ手を出す。そして向かう視線は一直線。こんな物を寄越すのはアイツ以外に考えられない。視線の先にいるショートボブで中世的な顔立ちの女子が俺に向かつて手を振ってくる。私立であり、ある程度校則の厳しい我が校で唯一茶髪という異端児だ。理事長の娘という事で黙認されるらしいんだが、それが事実かなんてのはどうでもいい。

中学時代からの友人で成績優秀・運動神経抜群・才色兼備という

要素が揃っていないながら活発的なことなど、俺とは真逆の人生を生きる奴だというのに、俺によく絡んでくる物好きでもある。今では俺の憎き敵である。この、人を指差し隠れながらケラケラ笑う光坂桃香^{もか}という人物は。つられて光坂の周辺に座ってる連中も笑いがこみ上げたらしく鼻先で笑ってるのが俺の眼鏡で矯正された目で捉える。

眼鏡の位置を直して怒りを押し殺して平静を取り戻す。

そして、光坂を再び睨み付ける。今度は俺の視線に気がついたか、数年も似たような体験をさせられた俺にしかわからないようなアイコンタクトを送ってくる。それを訳すと『注意力が足りないぞ、ムツリ助平』らしい。

(誰が助平だ、誰が……！)

怒りを押し殺せず小声でつぶやく、と

「あれえ悠ちゃん？ ムツツリって認めるんだ」

成績表を持って帰ってきた啓輔の奴がいた。玩具を見つけたような眼をしくさつて……！ 俺はムツツリでもムツ　ロウでも助平でもなんでもない！ なぜ、あの人の名前がとっさに出たのかは謎だが……とりあえず俺はノーマルだ。隣のクラスのオールバックみたいな幼女趣味などはまったくもってない。

だが、その前にこの短髪をどうするべきか……。俺は啓輔の抹殺計画に思いを巡らせる。

「そついや、すずっちとなんかやり取りしてたけど？」

「ああ、プリンススは伊達じゃないってわかったよ。してやられた」

席に座りなおし啓輔はさも面白そうに笑い出す。俺は担任が成績表を配ってるのをいいことに後ろに向き直り啓輔と談話を繰り広げる。互いに成績のことに触れ合わないのは小学校時代からの腐れ縁もあるのである。だから食いついてきたのはプリンセスとの瞬間的激闘だ。担任との我慢比べで争っていたことよりも啓輔としてはそっちのが重要なのであろう。まあ、俺としてはどっちも面白くない話題だ。

だから思ったことを適当に纏めて終わらせる。自他共に認められてるが俺は利己的らしい。それがこういう時に浮き彫りになる。自分が話したくないことは話さない。あのリアクションだってクラスの和みたくないものに馴染むための自演だ。下手にあそこでリアクションをとらないよりは心象はいいであろう。

「むう、でも男子生徒は数名は敵に回したたろうな、あの微妙な間は」

「うっせ、プリンセスの横顔に見惚れてたってことでいいだろ？」

「そんな男子は多いんだし」

「まあ反論はしないしリコ王には言っても無駄か」

リコ王って利己主義の王か？　そこまで利己主義が激しいわけじゃない。ただ自分の優位に立てるなら要らないものは捨てるだろうな、容赦はせずに。それは認める。

「いやいや、返って怪しまれるよ？　あーちゃん」

「あーちゃん言うな、光坂」

ヒソヒソと会話に参加して来た茶髪の娘の頭を小突く。頭を抱え込んだ茶髪は放って置くことにする。まあ、昨今までプリンセスの

フルネームすら知らなかったからプリンセスに興味のない男としてはクラスで黙認されてるだろう。男の狂った嫉妬と愛憎にまみえながら勝ち取るだけの価値はあるのは認めるが……。

待てよ、逆にそういう事で纏まってしまったら俺はその戦争に何も知らずに迷彩服とサバイバルグッズだけを持たされて戦火に踊りに来てるってことなのか？ 醜い男の争いに傍観決め込むつもりが観客席から落ちてしまったのか？

「新参者は即刻潰されるらしい」

「夏休みに入ってよかった」

俺は普段は夏休みになっても持ち帰らない上履きなどを持って帰る事を硬く心に誓った。

そんな本気の呟きに嘲笑が巻き起こる。それからどう発展したなんか思い出せないような会話に花を咲かせて光坂が呼ばれた辺りから啓輔がため息を漏らしながらプリンセスさまさまを見る。成績表を受け取った光坂はプリンセスとにこやかに成績の話題で盛り上がった。2人とも皮肉も込みで美形であるから男子はとくにあの2人に憧れてるらしい。俺は特に思うことはないが、静かになった啓輔から意識を切り離す。すると、プリンセスや光坂と一時的な別れに悲観的になってる男子の会話が成績という興味のない話題を避けていたら耳に入った。

自分から何でも誘えばいいのに。ここは校則も厳しくてバイト厳禁なんだから暇はいくらでもあるはずだ。俺は若き少年の恋バナに心から呆れる。すると、全体に悪寒が急激に走った！

「っうっ……！」

体をビクつかせ椅子が派手に動いたため不快音を鳴らす。そして一方的な殺意の眼が俺に集中砲火させられる。状況の整理もできない不可解な出来事を理解するためには、某菓子屋のマスコットみたぐべロをだしてる格好で有名な少女の真似をする奴が、爆笑している啓輔の近くにいた。

こ、こいつまさか……！ 耳に息を吹きかけたのか！？

「て、てんめえ」

「そーいうとこ抜けてるのは悪い癖だよ。あははは」

声を弾ませながら喜ぶ光坂。今日は厄日らしい。

今日という日が早く過ぎるようにと願った。この夏、最後の学校であった。

* * *

想像以上だ。

「暑いな」

「ああ」

「ぞおおだあなああ、あ、あ、あ、あ、あ」

俺と、オールバックにし後ろで髪を結んでる一見少女にも見えなくもない程の身の丈の少年こと、式水宗介しきみずすけが机を囲んで座る中で、この糞暑い時に啓輔の阿呆は扇風機をあたかも我が物顔で独占し、小学生みたいな馬鹿のような事をする。阿呆はもう阿呆だ、阿呆なら死んでしまえ。ああ、暑い時は人間のストレスは溜まり易いっていうが……啓輔死ねばいいのに。

宿題をやるうという事で我が家に集った宗助と馬鹿は前半は黙々と進めていたものの、室温30度を超えてるのではないかというのを感じ、更には湿度でダウンし現在に至っている。シャツが背中に張り付いて気持ち悪い。

なによりも、この街は海に隣接し貿易の拠点ともなっているような場所である、風は水っ気を含み重たく感じ、微かには潮の香りもある。昔は近くの遊泳できる浜で遊んでいたものである。今となっては懐かしい思い出の一部。この時期には海の家も出てくるほどで、多少の観光にもなるようなもんだ。

とりあえず、馬鹿は無駄に馬鹿で死ねばいいのに……。

「ちよつと啓輔、暑いのはみんなおんなじなんだから退いてくれない？ むしろ死ね」

「お前存在そのものが暑苦しいから今すぐ俺と宗助にアイスでも買ってこないか？」

「ちよ、お前ら！？ それでも親友！？」

お前は悪友で宗助は親友だ。いや、宗介みたいな重度の幼女に対し愛を抱くような奴を親友とは断じて認めたくはないかもしれないが、そう付け加えるのもめんどくさいんで俺は啓輔の扇風機独占か

ら脱出するために、扇風機の首振りをおんにし部屋に行き渡らせるようにする。とりあえず馬鹿は文句すら言う気力が先程のツッコミで消えうせたらしい。死ねばよかったのに。

ああ、駄目だ。暑いとどうもイライラしてしまう……。えっと、これは解の公式を用いて計算するからあ……えっと……これは虚数になるわけで……。

「ねえ、幽助？」

「誰だそいつ」

「こつ暑いと集中もできないね」

「無視かコラ」

計算に集中していた俺に割り込んでくる。某霊界探偵だったかなんかの名前をだしやがって、気は確かなのか？ そう思い宗介を見ると、机に伏せたままの宗介はうつらうつらと語りしていた。よほど重症みたいだ。最初は終業式の話で花を咲かせていた時とはえらい違いだ。

俺と啓輔が青い春を送る中で、名前の最後が『すけ』になるって事から始まってなんだかんだかで気があつてきた友人である。俺みたいな利己主義を疎まずに面白いと受け入れた男だ。さらに強烈なまでのサディストで自分の聞きたいことがあるのなら根堀葉堀と話させられる。ようは互いに対等な付き合いをしてるわけだ。

随分とダラけてる宗介を茶化してやろうと、宗介がとりかかっていた数学IIの宿題を覗き見する。決して俺がまったく問題欄を埋めてないからではない。問11の解答をすでに終わらせていた。最終問題でもあり大学の試験にもでるとおぼろげな記憶で先生が言っていた難問である。

「う、こいつ……」。

数学が得意でもう終わらせたからって仮にも親友に見せてくれたっていいじゃないか。こつこつとときに友情っていうのは考え物である。啓介は途中まで取り掛かっていた英語ⅠⅡを捨て今では扇風機を独占してるし、真面目にこの勉強会をやってるのは俺だけか？

なんか、悔しい。いや、ここで必死こいておいた方が後でヒイヒイなるよりは妥当か。

「まあ、といつても宿題をやらんと俺らでは宿題のプリントをなくして1日の半分を夏休みで荒らしに荒らした部屋で捜しねえといけなくなるからなあ……」

「うっ、確かに夏休みは暇で暇で、部屋がすき放題になるけど……」

「と、いつてもこの暑さじゃなあ……」

「身がはいらないよね……」

以前と発破しきれなかった宗介は啓輔の嘆きに乗るかの如く、机に伏せながらプリントを汗で点々とした水滴をつけた。そして、すでにどーでもよくなってきた俺は、先ほどの誓いも関係なく机にダウンする。昼ということもあり空腹も相まって……ああ、もう干物にでもなりそうだ。リアルに脱水症状起こしてもおかしくはねえぞこりゃ？仕方ない、すこしダルいけど氷り入れたお茶を持ってくるか……。

涖々と立ち上がった俺は軽い立ち眩みをする。ああ、脱水症状か……はやめに水分を補給しねえとなあ……。啓輔にはとびつきり熱いお茶を いや、そんな熱いもんを作るのも熱くていやだし普通にしといてやるか。命拾いしたなこの野郎……。

部屋を出る用件もあんなし言うのもめんどくさいんで一人で勝手に出て行こうと部屋の扉を開ける。するとお盆に冷えてそうな麦茶入りのコップを運んでくる我が妹を見つける。コップの数は3つでちょうど俺と宗介たちで数が合う。

俺の視線に気がついてか、ツインテールを元気よくパタパタさせて近寄ってくる。歩行することによって団扇の機能にもなりそうだな……いや、ならないだろうけど。

まあそんなことはどうでもいい、お茶だお茶。

「おーわりいな凜^{りん}」

お盆からコップをひとつ奪い取り一気に飲み干

「あああああ!!」

「んっごふう!？」

マイシスターの絶叫により盛大に麦茶が気管に入り咽てしまった。妹のなにしゃがるこの糞兄貴という無言の威圧感を受けながら俺は数度、咳をしてから息を整える。前に、当然のことながら凜の華麗な細身の足から繰り出される熊すらノックダウンするであろう強力なキックが俺の脛に見事に

「このボケエ　!!」

「あぎやあああああごぶっげほ!？」

叫んだら咽た。手から落としそうになったコップを割ったら後々が面倒ということで瞬時に体を、痛めた足でそのまま直撃落下コ-

スから反らす、よって全体のバランスを崩した俺は脚をもつれた無様な姿のまま尻餅をついた。なんとか爪先であてて力のベルクトを反らした俺は一安心したのも束の間、激痛が襲う。

「どうしたのお、凜ちゃん」

「どしたの、悠助？」

扉を開いて顔を出したのは宗介と、それから凜の部屋からもで

、ご近所づきあいでは高校では別の学校であるが最近疎遠気味にはなっているが世間体では幼馴染という間柄の って、なんで古郷こご郷がいるんだよ？ つうか、いてえ……！ これはめっちゃいてえ……！

折れたかもしれないぞこれは？ いや、確実にヒビは入っただろう？ ああ、もう考えがおいつかねえ ！！

「熊殺脚に……のうおおお……」

「まったたく、これだから兄責は……！」

謎の熊の鬨気を放ちながら仁王立ちの我が妹は実の兄を容赦のない蹴りで踏みつける。冬眠中にいらっしやいした旅人を蹴るかのように蓄えを増やすために熊は目を輝かせ俺をひたすらに攻撃 って！ まて！ 兄を蹴るな！ 蹴るんじゃない！ これでも兄だぞ！？ 2歳上だぞ！？

「ははあくん。さては悠助？ 凜ちゃんたちの分のお茶を飲んじやったね？」

「あ、あれは凜たちの分だった……、のか？」

ああ、だからこんなに怒ってるのね。自分のいい方に解釈した俺が間違いだった。

「それをぬけぬけと……」

「ま、待て！ 話を聞け！」

「それは悠ちゃんが悪いよ……」

「悠助が悪い」

「よくわからんが、死んだほうがいいぞ？」

「あははは、バーカバーカ！」

ゲシゲシと、俺を蹴りながら凜。

身を低くし急所の首を両手で防ぐ俺。

古郷の多少、遠慮の入っているが否定の言葉。

ぶった切る宗介

ふざけんな啓輔の分際で。

騒ぎを聞きつけてか、光坂が指を向け高らかに……ん？

「な、なんでおめえがいるんだ！？ 光坂ア！？」

叫んだ後に思い出したんだが、コイツは一応妹の先輩にあたったんだと、母校に在学する妹を思い出して納得したのは黙ってよう。みんな俺がそれを忘れてたなんて露とも思っていないからだ。

* * *

なんでせまってくるしい部屋に全員が集合しているんだ？ そして俺は当然のごとく正座をさせられているのだろうか？ そんなに制裁が足りないのか？ 兄をなんだと思っっているんだよ。

ああ、くそそう。

「悠ちゃんは昔から思い込みが激しいんだからそういうことしたら駄目でしょ？　そういうのはちゃんと許可をとってからじゃないと……」

なんで古郷が説教してんだ。

そついやこいつ昔から説教癖がなかったか？　いや、それを差し引いても古郷に説教を受けるなんて納得できるか。そもそも人口密度がおかしい。なんでこの部屋に6人も入ってるんだ。3人でそれなりに過ごしやすい広さだったのに……！

（あんな幼馴染がいるって大変だねえ？　悠助）

（そういうならもらってくれ、宗介）

（悠助、君は世の中の半分の男性諸君を敵に回したよ？　僕も含めて）

（俺もお前の敵だぞ）

肩身を狭くしてる男群集のヒソヒソ話を繰り広げる。ってか、俺に幼馴染がいるのは啓輔のやつは知ってるだろうが。でもそれは形だけであって俺とはほとんど疎遠になってるのも啓輔は知っているはずだ。中学時代に何度か教えたはずだ。

凜のやつは昔っから古郷にべったりだったから今も仲がいいらしいが……。断じて俺と古郷にそんな関係はない。と、いうか俺自身が否定したんだ。幼馴染の男女なんて所詮はそんなもん。他に仲がいい友人が出来たらおのずと係わり合いは失せる。

いつまでもまだるっこしい関係があるのはいらぬ誤解とかも産む。だから古郷とは縁もしつかりと切った。と、いつてもそれは俺だけの話であって凜とは係わるな。とかなんて言っていないし別に家

に上がりこんでくるぐらいは構わないが……。

「悠ちゃん、聞いてるの？」

金の切れ目は縁の切れ目なら、時の切れ目は友の切れ目。

もう別の道を歩いてる無関係な隣の住人が……何様のつもりなんだよ。

「悠、ちゃん……？」

俺の怒気を察してか。さっきまでの捲し上げてた面影はなく、なにかに怯える小動物のように写った。この空気を悟った凜は立ち上がろうとするが、それは事情をよく知ってる光坂が遮る。でも、光坂が凜を押しとどめることに意外なものを隠し切れなかった。俺はゆっくりと視線を古郷に戻す。

そういえば、こいつと縁を切るときになんて言ったけ？

そう思い返しながら口は動く。

「お前のウザイとこ嫌いなんだわ」

そう、別れ際に俺は素直にそう言った。いままで溜め込んだ思いをぶちこめるために。なんで、そういう事をする必要があったか？記憶を探ってもあいつのその時の顔は思い出せないでいた。たぶん、似たような顔をしてたんじゃないのか？セミロングの軽くカールをさせた自慢の相変わらぬの髪型。こいつはなんにも成長をしない。

いつまでもガキじゃないんだ……ここは、

「なあ悠ちゃん？」

「空気を読め、啓輔」

ビシっともつと強く言つてやろうと思つたとき。となりから何故か俺と同じく正座をしていて足が痺れたのだろうか？ 足をもぞもぞとさせる不気味な生物は話に割り込んでくる。となりにいるため、この人口密度なり湿度なり、今日の最高気温である37 だつたりで限界が近いらしい。

つていうか、悠ちゃん悠ちゃんって、どいつもこいつも……。啓^バ輔が悠ちゃんって言うようになったのも古郷のせいだ。なんかどーでもいい怒りがふつふつとわいて来るが、啓^バ輔の空気の読めなさで気分が殺^そがれた。

これ以上、追い詰めるのはやめておこう。いまさらあほらしい。俺とこいつは無関係じゃないか。関わることすでに意味をもたないやがて俺の怒りの矛先が別に向けられたのを感じ取つた光坂は立ち上がり、凜に話しかける。

「凜ちゃん 私たちも宿題があるんだし行こうよ」

「あ、はい」

凜からの殺気のコもつた視線は気にしない。自己中心的なのは理解してるし自覚もある。そもそも利己的に動かないで回りに気を配つたりいい顔する奴は馬鹿だと思つ。それが自然に出来る奴は正真正銘のバカだとも思つ。回りを気にしてばかりなんて疲れる、自分は自分のためだけに動けば十分だ。

他人のために動けるならより自分のために動く。それが当然のことじゃないか。

無言で出て行った古郷がドアを閉めるのを確認すると俺は姿勢を崩すと宗介の非難めいた視線が突き刺さった。漫画やなにかでいえば目を逆さにした半円球のようにジト目で俺を見てくる。呆れ半分といった所だろうか？ 元から辛辣な性格をしている宗介である、古郷に対する対応に物申そうとしたげで、あるがもう半分には諦めの表情が伺えた。

周囲から辛辣と評される俺と、宗介がから汲みとめれる表情。

「悠助がどう転んでも利他主義には目覚めなれないと思ってたけどねえ」
「わるかったな」

俺はその皮肉めいた言葉を受け流す。宗介自身もそれを望んでいないはずだから。そうやって適当な返事で返す。

「いい加減に許してやったら？ 清海ちゃんのこと」

口を開いたのはベッドで大の字に寝そべっていた啓輔が身を起こして言い出してくる。宗介は疑問符を浮かべた顔をしている。啓輔はというと奴の心配をしようだ。あいつもそう馬鹿ではない補習がいやだって理由で教科書を丸暗記し今では学年トップの座を永遠の物にしてるあたり、並外れた記憶能力と応用力が身に備わっていることが伺える。当然、あいつの記憶力では俺よりはあの事を覚えてるに違いない。

「清海って……、ああ……悠助の幼馴染」

状況がやや追いつかないらしい宗介は品定めするような釣りあがった目で啓輔を覗き見る。いかにもいい加減そうな顔をしてる事に宗介は訝しげな目で俺を捉える。どう反応していいものか思案する俺よりも、先に啓輔が動いた！

「実はな晴海ちゃんが…」

喜色満面。それを体言するような顔で俺よりも早くに啓輔が口を開いた。一足遅れた俺はその事実を言わせてはたまるかという一身体動こうとするが急に立ち上がったために凜の攻撃やら夏バテやらで立ち眩みを起こす。

それが、決定的な敗因であった。

スイッチの入った宗介に数学の宿題と引き換えに俺の人生の汚点を話すことにした。

* * *

「よお、啓輔」

「悠助め、古来より悠助というほうが悠助なんだよ悠助」

「啓輔か？ 古来の定説にばかり縛られる啓輔なのか？ 残念な啓

輔だなあほんつとに」

「悠助すぎて呆れるよ悠助」

「もう馬鹿馬鹿うるさいよ、悠助に啓輔」

「なんだと？ 宗介」

「宗介はお前だ、宗介」

「おっはよー、さんばか」

「……なっ……！」

照りつける太陽に焼けるような砂浜。鼻につく潮の香り耳に心地よい清涼音。湿った微風は息を大きくすうと少しだけむせ返るような重たい感触がした。そんなこんなで現実逃避を続ける俺らの肩を叩いて来たのは紛れもなく、光坂桃香であろう。

白い半袖のパーカーを羽織って朝っぱらから元気爽快なのが伺える。能天気というかなんというか、別に泳ぎにきたわけでもないのにはしゃいで楽しいのか？

夏休みで暇をもてあます俺らに啓輔の叔父さんが夏に経営している海の家ヘルプ……とは、名ばかりのバイトを頼まれたそうだ。校則に違反する上にこの時期の海なんて人の集まる場所に、そして地元の高校の連中が集まらない訳もないのだが、バイト代はでないという無鉄砲なことで（実は啓輔に前払いしてもらっている）通そうということらしい。

俺は最初は反対したものの、啓輔が先に話をつけてきた凛に宗介、光坂に古郷という面子は二言で返事を返したという。実際のとこ暇でしょうがなかった訳だし宿題も残すは昔ながらの読書感想文だけなので総合文学の科目を得意とする俺はとくに苦でもないため話を請け負ったのだ。

なにより光坂は理事長の許可を貰ったということで心配な面はなくなっただけというのが大きい。

すこし2日働くには多いバイト代も貰っていることだし、夏休みを有意義に過ごせる時間でもある。軽快に先に進んでる光坂を見送る俺らはお互いを見ながらなんともいえない空気になる。無言のま

まお互いに明後日の方向を向きながら歩き始める。

「しっかし……、清海ちゃんも呼んだのによく来たなあ？」

その沈黙を破ったのは古郷を誘ったであろう啓輔だ。色めきたつ声が海水浴場に響く中でさっきの沈黙を一蹴するには十分の話題であった。無駄に明るい啓輔の声に意図を汲み取った宗介が介入してくる。わかってた、こういう話題になるのはわかってたんだ。

俺が光坂の事が好きだという黒歴史を古郷が光坂に口走ったことは。

青春まつ盛りの学生が食いつかないはずがない。中学時代の俺は今とは違ってまだ少しは仲がよかった頃の話でしかないし、過去バナに花を咲かすほどよろしい過去はない俺の唯一の汚点であり、話題のオカズといっても過言ではない話だ。

要約するなら触れられたくないが修学旅行などで根掘り葉掘り聞かれる、笑い話になる出来事だ。まあ、古郷はこの一件で俺と縁を絶たれたもんだと考えるとと思うが、実際は幼馴染ってというのはその頃の不安定な時期には重しだったんだ。

ようは間柄を勘違いされる。それが非常に煩わしかったから俺は、『学校では話しかけるな』ときつく言ってしまったてそれが改善修復とはあんまし考えては居なかったが、これは少しいい機会かもしれない。そう思ったからバイトに来たとも言える。

それが、俺を利己主義利己主義と、啓輔が言ってくる元凶にあたる。

「悠ちゃーん？　いきてるかあー？」

「ん？　ああ……少し考え事してた」

「清海ちゃんのことも考えて仲直りしよーって？　ハハハ、悠助がそんな利他主義には目覚めないか」

「うら若き男女が6人寝泊りして働くんだよ？　何か期待してたりねえ」

好き勝手いいやがって……。確かに古郷のためなんかではない。それだけは確証がある。いや、というより古郷が仲直りしたいのか……？　昔のような関係には修復はいまさら不可能だし距離をもう一定以上お互いがとってあるから別にどうだっていいだけで……。

結局はどーでもよくなつたから仲直りしよう。そういう最低な考えが古郷のためになるわけがない。ただ俺が　ん？

俺が、なんだ？　別に仲直りしていいことがあるのか？　いや、ないだろ？

「バール、ホテルに泊まるわけじゃねえんだし一通り済んだら解散だろ？」

「ちえー、こついうのってつまんないよね？　悠助」

同意を求め宗介の頭を小突く。変な思考を振り払い意識を会話に集中させる。

俺はいつもより大きめのリアクションを、アメリカ人が肩をすくめたようなテレビかなんかで見たようなものを真似てみる。いつものリアクションと違うことを疑問に思わなかった啓輔は能天気な笑いを宗介に向ける。海は人を少し解放的にするらしい。

そう、きつと俺が仲直りなんて考えたのは海に来たからだと納得する。

「うるさいなあ……」

そう、ぶーたれる宗介をよそに俺は海の家に向かって歩く。

「でも、女子に日焼け止めをぬったくりたいよなあ……」

俺と宗介は無意識のうちに首を縦に振っていた。

* * *

「叔父さあん、交代来たよお」

先に来ていた凜と古郷の視線がこっちに注がれる。お客にバレないように一安心したように息を吐いた。古郷はともかく凜は初めてのバイト経験でもあって疲れただろう。俺は肩を軽くたたいて激励すると、目は『もう少し早くきやがれ糞兄貴』と言っている。人目がついてなかったら脛を蹴っていたところだが俺は気がつかない振りをした。

そういえば先に来ていたはずの光坂がない。道に迷ったか？

「凜、光坂は？」

「桃香さまはお客さん呼び込みにいったよ」

「ふん」

凜は光坂をさま付けで呼ぶ。まあ従順なシモベとなり進学に役立たせる気なのであろう。凜の第一志望が俺が現在通ってる高校だ。偏差値もそれなりにあり凜の現状は厳しい段階である。もともと俺がここに通ってるのは家から近いこともあるが、とくに進路希望がなかった俺はパツと思いついたのが在学してる高校である。

俺は適当な相槌をうつと凜はそそくさと店長、啓輔の叔父さんの場所に戻っていく。

鼻腔に焼きそばの独特な香りが食欲をそそる。もう11時だ、6時から準備してた凜たちはよほど空腹だったのだろう。少し表情筋が緩んでる。古郷もなんとか保とうとしているのだが、眉がびくびくと動いて面白い姿だ。

朝の内に来た2人が海岸の掃除や、海の家戸や窓を開けたりさまざまなセッティングをしてくれたから後は客をさばいて片づけをするだけ。だいたい17時には店じまいをすると言ってたので片付けは全員でやるとして今日は遊べそうにない。客足も昼時で多くなってるから早々に代わったほうがいいだろう。

「内容は昨日に話した通りだから、わからないことがあつたら午前中に働いてもらった子たちに聞いてね」

頭をタオルで縛り褐色の肌にノースリーブのシャツをはいた細めで優しそうな印象を与える筋肉がオ　リスクに等しいと思われる、啓輔の叔父さん　俊二さんが手早く仕事の内容を言う。内容は昨日に聞いたとおりで非常にわかりやすい説明だった。最後の確認に昨日と同じ内容だよってことは間接的にこうなる「仏の顔も三度までだから一回は許すけど…」である。ようは糞忙しいからさっさと

仕事を覚えるよ。でもある。

過去に湘南を制覇した族のヘッドである俊二さんからそんな気配が漂った。ちなみに古郷のお父さんとうちの母さんはその族の構成員だったらしい。ちなみに言うが湘南は母さんや古郷の叔父さんの地元でもなんでもない。ただ、とある漫画に影響されてと言ったのが印象的だ。

計り知れない行動力、俺は母さん（あなた）に似なくてよかったです。

まあ世間的に楽と思われてる海の家バイトだ。適当に客さばけばいいとだけのそんな軽いノリのまま俺は挑むことにした。人生ではじめての社会勉強でもある。海で働けるなんて逆にラッキーと考えて心に余裕をもっていこう。少しでも余裕を持たなければやってけない。そんな感じのが先に働いていた凜たちで痛いほどわかった。

「悠ちゃん！ そのテーブルじゃなくて反対の」

「はい、パラソルの貸し出しですね？ それではこちらに」

「はい、焼きとうもろこしできましたよ！ よろしくね」

「啓輔！ 浮き輪の空気たのむ！ あのピンクのイルカの奴！」

つまるところ、余裕がないことはわかっていた。

入れ替わりは丁度のこと昼時。そうともなれば客足のペースもはやまり、なによりも炎天下の中であただしく動くのは非常に体力を消耗する。それに浮き輪やビーチパラソルの貸し出しも昼食のついでに行うから店内は必然的に人数が少なくなってくる。

さらにはしつこいナンパ男にも店員から口をださないといけないらしい。いまの所そういつた姿は見られないが俊二さんから言われた任務を遂行させなくては俺の身が心配になつてくる。主に母さんの鉄拳制裁は凜の蹴りの比じゃないだけだ。鯨を気絶させたという噂まで流れている。本格的に人間をやめるとしか思えない。

あくまでも噂であるらしいのだが、俊二さんに前に聞いたとき『あれはすごかった…』と、残した。それは、あの時に飲んだ酒が言わせた幻だと信じてる。じゃないと俺は人を信用できなくなつてしまふ。ただでさえ自他共に認められてる利己主義だ……身の安全が第一に決まっている。

しかし、古郷は呼び込みをしてるんだよな？ この炎天下の絶好の海水浴日和で大丈夫なのか？

あ、いや……凜がまわりにいるだろうから大丈夫だよな。どうせゴマをするためにドリンクでも持っていただろう。今は目の前の仕事に専念しよう。頃合をみて啓輔あたりに呼び込みをさせたほうがいいか。昼時だし女が呼び込んでた方が集客率はいいだろうし、昼が過ぎたあたりに交代をしようか。

「悠ちゃん！スナック菓子適当に500円ぶんくらい見繕つてだつて！」

「わかった。少々おまちください！」

声を大きめでやり取りを行う。俺はフランクフルトやカキ氷などと平行してるスナック菓子を適当に500円ぶんを見繕う。250円〜100円までののがあつてお客さんを見て対応する。4人連れだと啓輔が指でコンタクトを送ってきた。俺は指を4本だしお客さんにバレないように確認をとると、グーサインが出た。

100円代のお菓子を5つ持ってレジへ向かうと会計をパツパと済ましてお金をもらいお釣りを差し出す。そういった当たり前のやりとりをして、いろんな作業をこなしていく。お客さんが出て行ったらすぐに入ってこれるようにテールブル吹きやトレイの後片付け、それから先ほど言ったような作業を繰り返していく。

昼食をとらずに働いていった腹にはだいぶこたえた。

それを尻目に美味しそうに焼きそばやフランクフルトなど、焼きとうもろこしとか香ばしい香りの中必死こいて働く。飲食業は結構マズい仕事かもしれない。光坂も顔の造形はいい方だ、どっかのプリンセスにも引けをとらないほど男子には人気があるしな。それよりもプリンセス、珠洲原（珠洲守です）かあ……確かに、やっぱりクラスは同じでも無駄に世界は狭いと評されていては所詮は夏休みになれば無関係な存在か。

元々、住む世界だって違うんだ。

「あれ？ 珠洲守さん？」

世間が狭くても、世界が近いわけじゃ いや、訂正。世界も案外狭いもんだ。

少し疲れた顔をしてる珠洲林（珠洲守です）と数名のクラスで見覚えのある顔が来ていた。落ち着ける場所で安心でもしたのか？ いや、大方の予想はできた。

「えっと、式水くんだったけ？ 隣のクラスの」

「へえ……。案外やるんだプリンセス」

隣のクラスでそんなに親しくない宗介の名前をしってるプリンセスはやはり我が校のプリンセスに恥じないものだった。そんな中で俺はおでんをお客に出してきたところで俺は割ってはいれる。宗介め、サボる気だったな。

「3名さまでよろしいでしょうか？ お席のほうへご案内いたします」

俺は比較的かつ俊敏に接客をする。それに宗介はこれが危険な行為だということをおかちやいない。なんてたつてバイトが禁止なのだ。先生に報告されるなんて脅しを食らった日には俺らは明日は学校で補修対象の処分になるかもしれない。故に俺は顔を引きつったままの他2人と気がつかないが、どこか腑に落ちない顔をするプリンセスを案内する。

俺の冷や汗で状況を察した宗介は慌てた顔で水の準備に向かう。いまだ注文とかに追われる啓輔にもうしばらくの辛抱だとエールを送ると、小さな悲鳴がひとつ。後ろの案内していたプリンセスと名もなき少女一向だ。

「人のところのお客さんにならないでよねえ、ささ、行こうよ」

金髪のガラの悪そうな男が珠洲木（珠洲守です）の腕を掴んでいた。小麦に焼けた肌、見事に割れた腹筋、体中のピアス。なんだこれは？ 人類なのか？ いやグラサンぐらい外せよ。ってか、人のところの客……？

「ちよ、ちよっと！ お断りしたはずです！」

ああ、なるほど。事態の全容はそういうことか。声を荒げるただでさえ目を引くプリンセスは余計に注目をかき集めた。やばい、ここで問題を起こされては客の信用にもかかわる。さてどうした者かと考えると、

「ヒヒヒ、そっちの2人はあげるから、この子はうちが貰ってくよ」

「今更そんな悪党な馬鹿がいるのか？」

「きいー！ なに素直に言ってくれちゃってんだテメエ！」

ん？ この宇宙人じゃないなさつきから小うるさい奴は。いまだに珠洲なんかを口説いてるし。というよりこんな名もない少女2人を預かったってなんの特にもなったりはしない。いや、むしろ邪魔なだけだ。つか、お飾りじゃねえのか、寿司の出前注文で寿司の見栄えを引き上げるあの緑のあれレベルを置いてくな。むしろ逆にしろ。

「ヒヒヒ、僕を敵にまわしたな。無視するな！ 無視！」

「あ、なんだ。子供か」

さつきから小うるさいのがいると思っていたら足元に140代であろうか？ 低身長の背伸びしたヤンキーな格好をした少年が居た。いや、こんな真夏の場所に革ジャンってなんだよ。とりあえずプリンセスが引き集めた視線は今度は俺と子供に注がれるようになった。

「ほら、子供が大人の集客戦争にかかわっちゃ駄目だよ」

とりあえず可能性を言ってみる。

「きいー！ 僕の挑戦へと受け取った！」

あ、やばい。覚悟はしたつもりだけど地雷を踏んじやった。プリンセスの目が痛い。俺が子供を馬鹿にしてるとでも思ったのか？いや、俺はこの偉そうなガキには極力かわりたくないんだが、全員が傍観に入ってる状態じゃ俺がやるしかない。このまま渡してもいいんだが何をされるかわかったもんじゃない、逆恨みとかされても困るし、学校側の男子にバレたら血祭りだ。

ここは見栄を張るしかない。

「迷子ですか？お母さんとお父さんと来たの？」

「あ、弟と……って、違うヨ！」

金髪宇宙人が礼儀よく頭を下げた。なるほど、寡黙な男らしい、たしかに手首を掴んだときこの男はなんも喋ってなかった。ってか弟おおおお！！！？ どう見積もっても俺より年上だぞ！？

「お、お前。本気で僕を怒らせたナ……」

勝手に怒ってるだけだろ？なんて言えない。本格的に俺もおかしくなってる来た。

「15時にあるスイカ割り大会で勝負だヨ！ その可愛い子ちゃんを賭けて！」

な、なぜそうなる？

「わかりました。とりあえず此方のお客様は貴方のところを嫌がっておられるので、この時間は私たちでお接客させていただきます」

厨房からヌツと出て来た叔父さんがそう纏めた。は、はい？ ち

わる。全12個隠されたスイカでいち早く駆けつけて指定された場所
所で割ればいいというもの。

ちなみに男女ペアということで運動馬鹿の啓輔は頼れないと来た。
ともなれば腹を割るしかない。

「俺はその場所にいればいいのか？」

「うん。そうだね」

「でもスイカなんだから叔父さん？ 店で買ったスイカを使われたら
どうすんだよ？」

「スイカには毎年変わるシールが貼られてるんだ。それを審査員席
に持って行って割ってはい終わりってこと」

「へえ……それじゃあ誤魔化しが聞かないんだ。シールがついてな
いってことはとつても剥がれたら無効ってことだろ？」

情報を纏めるとそんな感じになる。

「で、大事なのはパートナーか」

「今この場にいるのは、古郷、凜、光坂に……珠洲野か」

「あー、酷いな安里くん！ 珠洲守ですー」

え？ そうだったけか？ 夏休みに入る前は覚えてた気がするん
だが……。

「あの一？」

「私たちは？」

おずおずと手を上げるのは名もなき飾りたち。

「却下。いろんな都合で却下」

当然のことで俺は却下した。約束の時間まで1時間。さて、遊泳禁止区域の砂浜を思い返す。範囲はけっこう広いぞ……？ そう考えると12個を砂に埋もれてるとしたら踏まなにかぎり分らない。運と時間の勝負にもなる。こんな飾りに任せていたら負けてしまう。

勝負事だ、更には俺と(ついでに)店の評判に繋がるなら死に物狂いで勝たなくてはならない。むしろ勝たないと俺の命が俊二さんと母さんの手によって摘まれてしまう。そして摘まれた俺という名の花は学校で焼き殺される。身震いがする。

戦闘能力の良し悪しでいうなら凜であるが、コイツは完全に観戦する気がまんまん。となると自ずとして3人が手を上げる。当然、残った凜と飾りじゃ可愛そうだから凡人A、B以外の、古郷に光坂、そして

「そ、そうだ！ そもそもお前が元凶じゃねえか！」

珠洲森(珠洲守です)である。

「あ、ひどーい！ そんな事を言うとは先生にバイトしてたって報告するよ？」

「うぐう」

用意はしていたが、罰として補修組みと合流は硬い。

「……………協力してください」

「迷惑かけちゃったし仕方ないよね」

「まあ、すすつちがそう言うならいいけど」

自体が丸く収まりそうな中で、一人だけ下を俯いてるのが居た。
古郷……？

和気藹々となる中で、そうだ、コイツはいつもこんな感じじゃなかったか？ 説教癖が強いのは俺ばかりで普段はこういう中では随分と大人しい奴だった。ずいぶんと忘れてるもんだな。自分でもビツクリした。まだ直ってない、いや……変わっていかないのか？

「わ、私」

「はア……」

俺はプリンセスにチョップをいれた。誰もが口をあぐりとさせる中で俺は言う。

「お前はそこまで自己表現が激しいのか？ おお、恐ろしいことの上ない。そこまで自分が目立ちたいのか？」

「え、いや……別に」

「そうやって観衆の目を独占させてなにが楽しい。そもそも今の前は賞品で参加資格はない」

「えー」

ぶーたれるな。俺でも結構、不安なんだぞ。バイトがバレたら大変だって。だけど、これは仲を戻すいい機会だ。このもやもやしたのを引きずるわけには行かない。俺は突拍子もない俺の行動に呆けてる古郷の手首を掴んで引き寄せる。

「最強団、再結成だ」

そう。俺と古郷が幼稚園時代2人で作った秘密基地のさいに作ったチームの名前だ。このネーミングセンスは過去の俺であろう。俺

は全員の珍獣をみるような目を耐え抜いて立ち向かう。

「え、えっと？ 懐かしいね？」

「そうじゃないだろ……」

俺はがっくりと肩を落とす。まあいい、決戦に臨むだけだ。

* * *

開始から5分が経過する中で俺は戦っていた。理由は単純だ慎重に砂浜に気を配りながらスイカを探してるのだ。エントリー直後。俺は古郷にとある交渉をした。それは簡単だ、割るほうと探すほうの交代。こうやって探すのは体力があるほうが兼任だ。あのちっこいガキは俺が探す側だと気がついたのはエントリー後、やつのおちよつと待てとか言う姿はこっけいであった。

参加者は20人ちよつと、海の家の特鋭たちに紛れながら参加する。掘り返されたような痕があるがたまに其れがハズレとかかれた紙がでるケースでもある。探す場所がバラけている、誰もまだ見つけてはいないのである。とはいえ、油断はできない。特にこの海の家の特鋭たちは他との絶妙な距離を保ちながらいつでも奪える覚悟をしている。やっぱし、古郷に任せないでよかったか。

つたく、砂浜がウザいし日光が痛い。

どつする？

今、一番怪しいのはあの岩場だ。つっても足場が悪い岩場で戦え

る自信はない。それに一般参加の連中も捜して見つかってないんじゃない……。そういえば、海にも足をいれてる連中が居るな……。まさか、波打ち際にもあるのか……？ たしかにその可能性も考えられるがあっても掘り返された場所もわからないし掘ってもすぐに波で埋まるから地味な作業だ。

岩場か……。

「なんで俺がこんな目に」

文句を言っても仕方ない。俺はすり足で歩く。せめてヒントになるようなものがあればなあ……。なんでありそうな岩場に海の家の中がいないんだ？ 適当に捜してると違って血眼に獲物を定めながら自分の獲物を狩ろうとする魂胆が見え見えだ。

なんだかんだ言っても、今まで仲良くしたた奴に絶交を言われたんだ。今思えば情けない事をしたと思う。あの思春期の不安定な時期に俺は本当に古郷が邪魔だったわけじゃない。ただ、変に意識し始めたからだ。光坂に何となく惹かれてから、その関係と勘違いが邪魔になった。

別に光坂が気にするような奴じゃないって分かってた。

情けない俺の戒めは俺が解くしかないんだ。仲直りってのは意外と大変なものだ。あいつのために仲直りするんじゃないかって情けない自分との決別だ。それで、今まで溜め込んでたものをちゃんとやっておこうか、光坂に。なんだかんだかであのバカに流されて有耶無耶になったが……俺って節操ねえな。

「なんだ、あのまんまより、こっちのが楽しいじゃんか」

単純な話だった。オマケにプリンセスとも適当に遊んで駄目亭主になってやってもいいかもしれない。そのタメにはあいつらに勝たせるわけにもいかないわけだ。最低限、やつらの優勝を抑える。それで、勝負は有耶無耶だ。でも、負ける気はしない。

なんか、そんな気がする。

だから岩場に俺は脚を運んだ。波がけっこう強く打ち付けてる波打ち際、波が引くときにサッカーボールのはいつてるネットのようなものがあるのが見えた。岩に紐が括り付けられてるのが動く気配はなく、波はそれに強い。この足場が悪い場所でそんな紐を取ってる作業なんかしてたら岩に激突しちまうな。

確かにこれは避けるわけだ、いかにもな場所にあるのは取れない証拠。だが裏を返せばこの場所にあるということは誰かが仕組んだんだ。日中からこんなスイカを隠してたら客にバレしてしまう。隠すなら一時的に遊泳禁止区域とその砂浜を立ち入り禁止にした14時からの一時間。塩の満ち引きじゃないなら……方法はあるのか？いくら手が長くても最短距離でも手を伸ばしても届きそうにない。

しょうもないトリックで立ち往生させやがって……岩場の陰から様子を伺う。発見した騒ぎにはなっていない。ともなれば……やるしかないか。ネットを見据えて俺は！

まったく、運命の女神様つてのは最初からこのつもりだったのかと疑いたくなる。もし今日来たときに感じた漠然とした古郷と仲直りするか？つてそんな意識はこれをやらせるためか？

いや、どうだっていい。あんたは俺に見かたしてくれただ結局

の所。感謝してるんだぞ？ これでも？

ただ、これ以上めんどくさいのはお断りだ。

手に持った捨てられたビニール傘に確かな手ごたえを感じる。フエイクなんかじゃない、上手くシールがぶつとんでないことを祈りながら傘で引き上げると、紐がフックになにかに掛かってたらしく簡単に取れた。てっきにU字ロックかなんかだと思ったが、それだと無謀かそりゃ。

波もそれなりに強く打つのによく割れなかったな？ あ、いやこれは編み方に細工してある、殆どスイカを包むような段階で持ち手の部分がない。

「よし」

打ち上がった錆びた傘をみつけたのは偶然。ビニールの部分が丸八ゲになって錆びてた傘が運良くあった。毎年ここにこういう形で存在した怪我なくてはとれないスイカの匙を投げていた連中が、つまるところ海の家の中が探してたら簡単に取ってただろう。それぐれい注意を払えば見つかるような少し岩場の陰になっていた。運命の女神ってのは、今回ばかりは味方らしい。

「わりいが、地元人あまくみんなよ？」

* * *

「まったく、海から出てくるなんてビックリしたぞ」

「遊泳禁止区域だったんだぞ？ 一歩間違えたら」

「兄貴無茶しすぎ」

「そーんなにすずつちが愛しいのか？ ん？ん？」

「まあまあ、賞金はなくなってもPRはできたでしょ？」

適当なことを言いやがる。結局は優勝は俺でもあそこでもない別の参加チームであった。兄貴とにいさんと背中に書かれたタンクトップを羽織ってるスキンヘッドの一般だった。その少し後に海中からばれないように移動していた俺がバカみたいだ。

俺は苦笑いを浮かべたままの古郷に近寄って近くの椅子で腰を落ち着かせる。

「優勝する気だったんだけどなあ……」

「え？」

話しかけられてすっとんきょんな声をあげるバカを観る。

「『幼馴染』がタツグを組んでも負けるとはブランクは大きいな」
『お』

置いてけぼりになったプリンセス以外が目を白黒させる。

なんか、俺が泣かせたみたいで悪人役を買ったのはいうまでもないことだ。

むくわれねえ……。俺の努力ってなんだよ。

* * *

結局あの海で一躍うちの海の家が優勝組が一般参加だけあって持って帰ってき、かつあんな登場をしたために噂をききつけ足を運んだ客の中に先生も混じっていて俺らは仲良く、補修組と合流していた。

「ううう……。なんで私までえ」

そんな文句を呟く珠洲森を尻目にダブルソーダバーの半分を啜えながら適当に相槌をうつ。頷いてるだけであるが直訳すると『俊二さんの手伝ってくれて誘いを断らなかつたお前が悪い』と言う。

「あー、結局は自分の責任だつてえ？ ひどいよー！」

わかっておられたか。

「でも結局さ、なんでお前は俺とか宗介に普通の男子とは違う接触してたんだ？」

「ははは、それは2人が私の王子様だからだよ」

は？ なんていい返すべきか迷った俺は悪戯っぽそうに笑うプリンスからの答えは望めなかつた。コンビニを後にしたあとで俺は宗介にメールを送った。返答は覚えてないとの事。尋ねたことはわかってのとおりだと思つ。

俺はこの日、親と離れた家族連れできていたらしい少年と、幼馴染と喧嘩をした少年が仲良くなる夢をみた。そして大人たちが気を失うのを待っている間に痺れを切らせた2人の少年が暴れる少女を命かながら助け出すというドラマのような夢を見た。

……プリンセスの魔力。ってことかな？

これは、俺の胸のうちに秘めておこう。さあ、今日は夏休み明けで新学期。

なにかを期待してもかまわねえだろ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5451n/>

the Summer Sea Sky

2010年10月9日06時49分発行